

サルボダヤと我々の運動

—国際文化福祉協会の活動

杉 山 龍 丸
(国際文化福祉協会事務局長)

サルボダヤとは、インドの言葉で「心から起ちあがる」とか、「全てが向上する」という意味があるといわれる。この言葉は、インド独立の父であるガンジー翁が、その運動の精神を表明したものである。

日本でも世界でも、ガンジー翁の独立運動という、国民会議派の運動として紹介されているものが常識となっているようである。だがそれは、第一次世界大戦のとき、イギリスがインドの独立を約束をしたのに、第一次大戦後ローランド法で独立運動を弾圧し、アメリカで国民会議派の指導者を約五千名以上虐殺したので、指導者を失った国民会議派がガンジー翁に指導を求めたことによるもので、ガンジー翁の独立運動の本質とは性格的に異なったものである。

では、国民会議派の運動とガンジー翁が行われた運動とどう違っていたのか。国民会議派の運動は、純然たる政治的な権力闘争による政治運動である。これに対して、ガンジー翁の独立運動は、国民生活から如何に人間として生きるかという問題を解決し、個人の生活の自主自立から創り出していく方法であったということができると思う。

ガンジー翁の生涯を省みると、その歴史に

は四つの大きな転機があったといえる。

その第一は、英国留学。

その第二は、イギリス化したインドに失望しアフリカに行き、奴隷にされているインド人救済にあたったこと。

その第三。アフリカより国民会議派に参加しようとしたガンジー翁が、当時の国民会議派の指導者ゴガレーにその希望を述べた。

これに対しゴガレーは、ガンジーがアフリカで展開した運動をインドで踏襲していくことを希望した。そして翁はその希望と忠告に従って、自主自立の運動を最下層の不可触賤民の生活を向上させることをめざして始めたこと。

その第四。アメリカの虐殺により、国民会議派の指導者のほとんどが失われ、ガンジー翁が指導するようになったこと。

以上のことを考えると、ガンジー翁の運動の本質がどこにあったか判ると思う。

しかし、ガンジー翁がなぜ最下層の不可触賤民のなかから独自の運動を起され、その本質をあらわす言葉をサルボダヤといわれたかという、日本を含めてその他の国々の人々には想像も理解も出来ないのではなからうか？

私の祖父杉山茂丸は、アジアの独立運動に

関係し、ガンジー翁とはラス・ビバリ・ポーラスを通じて連絡していた。それに、父夢野久作は、インドのことやガンジー翁のことを話してくれていた。インドの大体の様子は知っていた。私自身は、第二次大戦中に陸軍航空技術将校としてアジアの大地と空を飛びまわっていた。そんなようなわけで、日本とアジアの大地の違いと、アジアの人々の生活と技術の実態は知っていた。

昭和三〇年、平和五原則問題から、ガンジー翁の弟子たちを日本に迎え、国民生活と産業技術の指導をした。

昭和三十七年には、指導した人々の招待ではじめてインドを訪問し、その実情に全く呆気にとられた。

私は、ガンジー翁がつくられたインド各地のアシラムを訪れ、ガンジー翁の後継者といわれるヴィノバ翁のブーダン運動にも参加して、つぶさにその実態を知った。

しかし、それらの運動のことより、私の胸を打ったのは、インドの大地の凄まじさであった。開いた口が塞がらないどころではなく私は恐怖に打ちのめされた。

私は第二次大戦において、現代の全面戦争

には勝利も敗北もなく、戦勝国も敗戦国と共に絶滅するという事実に向面した。人間はなぜ戦わねばならないのか？戦争が文化の歪みから生まれるとするならば、文化そのものに疑問をもたなければいけないのではないかと。戦争体験を通して、私はそのように考えていた。

しかしインドに来てみて、原爆や砲火のみならず、我々人類がただ生きていること自体が大地を枯渇せしめ、全てを廃墟にし砂漠化しているという事実に向面したのである。

インドの餓死の問題を解決するために、パナナ市からガンガ河を三回渡った。

中二〇Kに及ぶガンガ河の流れは、三年間雨が降らぬというのに豊かに悠々と流れていて、その五哩内陸は水がなく餓鬼地獄の状況である。フェリーボートにのってガンガ河の豊かな水を進むとき、正に白昼夢の感がある。

あるとき、釈迦が人類救済のため難行苦行したという前正豊山に登った。白い砂礫に流れる尼連禪河を渡って荒地を通り、前正豊山の頂上のアソカ大王が作った仏塔の跡に立つたとき私は自分の眼を疑った。ブツガヤ、それは釈迦が人類救済の苦行のすえ、一本の菩提樹の下で悟りを開き、仏教を創めたところ

ろである。しかしそのブツガヤの寺院を作るレンガを焼くため、約百哩四方の森林がなくなっている。前正豊山からブツガヤその他の周辺を眺めると、見渡す限り大地の肌が露出した荒野がつづいている。その荒野の砂塵の中に真赤な大きな太陽が沈む。

インドの西に流れるインダス河のほとりにハラッパという廃墟がある。そこは今から四千年前に突然死滅した。何故死滅したのか判らない。インダス河の清い水が豊富に流れているところである。しかしこのあたりよりインダス河からインドのラジスタンに至る砂漠地帯が広がっている。死の静寂、平和？砂漠は必ずしもこの地方だけではなかった。

古代のインド文化の栄光は空中楼閣か幻想のような感じであり、そこには五億五千万の人々が必死に存在していた。

ガンジー翁のサルボダヤ運動を考えると、我々は古代の世界に冠たるインド哲学宗教の幻影よりも、この現実、事実を考えねばならぬ。インドはアーリアンに継いで、蒙古族、回教徒、イギリスの侵略を受け、植民地となつて国民から徹底的に収奪し、国民は働く心を失ってしまった。

この現実の中にガンジー翁は立っていた。

彼は手作りの糸車をもって、山羊をつれ、最下層の不可触賤民をハリジャン（神の子）と呼び、一つの部落から一つの部落へと希望を与えて歩いてまわった。枯渇した大地、荒廃した心に今日を生きる術を与え、手を動かすことで今日から明日への希望と仕事を与えて歩いたのである。

この実践から生まれたガンジー翁のテーゼに次の三つがある。

真理把握、非暴力、奉仕

この言葉の切実さは他の国の人々には理解困難であろうと思う。サルボダヤとこの三つの言葉の中に我々の測りかねる深い思いがこめられている。

私は十年間のインド訪問で、インドのほとんどの地域を歩いた。ガンジー翁の足跡をたどり、ガンジー翁のお弟子達の活動に加わり生活をしてきた。だが、インドの大衆、五億五千万の中の四億に近い人々は、これらの言葉とは全く無縁の人々であった。

そこには、確かに大地があり、人が生きていたし、乏しいながら社会と呼べるものはあった。だがそこにいるのは、収奪搾取され、うちひしがれて、原始的なもので退行し、逃

避した人々であった。私は戦時中、満州の各地、東南アジアの各地、密林の奥の人々の生活を見た。しかし、インドの大地に足を踏み入れ、人の生活に接したとき、全く呆気にとられ、何度かの訪問をした何年かのあいだは全く不術がなかった。

数年前、一滴の雨も降らない状態が全インドをおそった三年間、私は餓死の状況を視察した。私の努力はすべて通用せず、最後のお金も使い果してアツダガヤを去った。釈尊が水浴したという尼連禪河の水の渴れきった白い河原に立って、釈尊が苦悩したという前正豊山にむかって私は思わず「インド人の馬鹿野郎！ 杉山龍丸の馬鹿野郎！」と大声で叫び、大声で泣いた。

日本人には逃げて帰るところがある。たくさんな餓えた子供達においかけてられて、必死になって逃げ帰ったことがある。しかしインドの人には逃げるところがない。海のようなガンガ河がヒマラヤの白雪から流れる水を悠悠と運んでいるのを知りながら、その傍で餓死している。こんな、そんな、馬鹿なことがあるであろうが、しかしそれは事実であり真実なのである。

サルボダヤは、この事実と真実より起った

と思う。私はこの一〇年、インドのガンジー翁のつくられたいろいろの運動、塾、そして多くの組織をみてきた。そして私は共にその活動に参加してきた。

ブーゲン運動をはじめたヴィノバ翁は、ガンジー翁の行けなかった多くの土地を歩き、インド人としての自覚と人として生きる道を教え、多くの土地・物・お金の布施を受けた。ヴィノバ翁がインドの各地をまわって説得することは、日本の天皇が説得して歩くことよりももっと高い聖者としての地位に支えられてのことであった。ヴィノバ翁が、未教育で何も知らない人々に与えたものは、土地や物、お金といったものよりずっと大切なものであった。それは、インドへの自覚であり、人の生きることの自覚であった。

だが、ヴィノバ翁の後継者に対して私は大きな疑問をもつ。

ジャイブラカシ・ナラヤンのサルボダヤ・サルバ・セワ・サンガはどうであろう。

ナラヤンは、米国で米国式の社会主義政策を学んだ。インドへ帰り、ネールと政権を争い敗れて、ガンジー翁の下で働き、サルボダヤ・サルバ・セワ・サンガを作った。これは、

てしまったことを意味していた。その結果、企画力の旺盛な人は企業家になり、無力なものは博物館化した。

しかしわずかではあるが、ガンジー翁の教訓や遺業を守り、更に新しい技術や方向を求めて、日本その他の外国に行き、新生面を拓かんとしている人々もあった。私は、それらの人々と共に、インドの大地、インドの国民に欠けているものを補うために必要なことを行なってきたのである。

宣言

全ての人は、その与えられた個性と生命を完全に発揮し、全うすべきである。

また、すべての地域は、夫々与えられた特産物をもって世界に貢献することの出来る機会が与えられるべきである。

我々の望む豊かな、そして、平和な生活が行なわれるあらゆる条件を創り出すことに努力する。

国際文化福祉協会創立趣意書

日本は、アジアの中の国として、アジア各国国民との友好・協力を具体化し、世界の国々とともに、世界人類の希望であります、豊

かな生活と、平和な社会の実現に努力しなければなりません。

国際文化福祉協会は、この問題を具体的に解決するため、アジアの各地域となかにある古代の文化のままでのもの、古代に非常に栄えた文化があったがために荒廃し、枯渇し、砂漠化したことから生まれる貧困と餓死、また近代化によって、多くの重工業中心の発展計画が実行されたために、多くの公害や社会問題、さらに深刻な民族紛争から悲惨な難民を生ずる、これらの実態を調査し、その解決の方法を研究しました。

これからの国際協力は、これらの問題の真相を深く研究し、さらに、それぞれの地域の国民生活のもつ、大自然のすべての条件を考え、それぞれに適切な方法を与えねば、その成果が期待出来ないようになります。

国際文化福祉協会は、多年、アジアの人々と協力して来ましたが、とくにインドのガンジー翁記念国民財団の人々とともに、努力してきました。大地と生活思想、自然環境を救う植林、水利問題、餓死、食糧に関する農業技術問題、農業手工芸、工業等生産に関する農具問題等の基礎の仕事を解決して来ました。

その結果、多くの生活様式と文化のある民族をもつ、全インドの問題に取組んでいます。

ガンジー翁記念国民財団は、国際文化福祉協会が具体的に解決し、実行してきました方法により、全インドの国民生活と産業の技術を向上せしめ、全インド各地の生産を開発することに決定しました。

そして、ガンジー翁記念国民財団は、国際文化福祉協会と議案書を作り、財団の中に、J・I・F・O (Japan India Friendship Organization) 日印友好機構を作り、各地の専門センターを決定して、協力体勢を整えています。

ここに、国際文化福祉協会は、インドでのガンジー翁記念国民財団と提携協力して、世界における人類の生きる問題と、人類の文化の本質について、調査研究を行ない、具体的に実施することにより、更にアジア、世界の問題に発展してゆくことになりました。

皆様のご支援、ご協力により、これら具体的な計画を実現化するために、国際文化福祉協会は財団法人としますとともに、国際機構を拡充してゆくことに致したいと希望しています。

何卒、国際文化福祉協会の具体的な実情を

御理解下さいまして、みなさまのより一層強力な協力とご支援をお願い申し上げます。

国際文化福祉協会事歴書(抄)

① 一九五五年

国際文化福祉協会の創立。平和五原則問題から、アジアの各種指導者、留学生、研修生の来日多く、これからの日本文化、国民生活、産業技術に関する案内指導を要求されたため国際文化福祉協会の名称をもって、指導を始める。

② 一九五六年～一九六一年

インド各地に専門技術指導センターを開設す。日本国内において指導した、ガンジー翁の弟子達が、それぞれの所属の塾に、専門の技術センターを開設す。

③ 一九六二年～一九六三年

インドの実情調査、各センター実地指導。ガンジー翁の弟子達の大会に出席の後、中部インド各地の実情を調査し各地のセンターに、インドの実情に基づく指導を行なう。

王舎城の仏蹟復興を始める。ネール首相に提案し、仏教の聖地王舎城(ラジギール)における、仏教センター、国民生活センター、科学センター、医療センター建設の推進会議

をバトナ市にて開催せしめ、王舎城の聖地に礎石を置く。

インドの農村統計を推進す。ガンジー翁の弟子達に進言し、ガンジー翁記念国民財団での蒐集を始めさせ、西ベンガル州での会議に出席す。

④ 一九六六年～一九六七年

餓死の実情調査と解決法の世界への報告。インドの餓死の実情を調査し、その原因と対策を研究し、ガンジー翁記念国民財団に進言し、日本大使館、日本政府、インド政府、国際連合より、餓死に関する救援方法について意見を求められる。

インドの餓死に関する報告書を作成し、世界各国、世界機構、各国報道部に送付す。

国際連合より地域開発について協力を求められる。国連事務総長ウ・タント氏より、餓死に関する報告書に基づき世界の地域開発について協力を求められる。

⑤ 一九六八年

国際文化福祉協会を任意団体として創立す。国際文化福祉協会のインドの事蹟を高く評価し認める人々が、インド国内と日本国内に増加し、希望によりガンジー翁記念国民財団の代表の一人カカ・カレルカル博士以下四名を

招待し、福岡、近畿、東京地区の各方面と協議し、任意団体国際文化福祉協会を創立した。

国際文化福祉協会インド地区本部が設置され、福岡に国際文化福祉協会本部総事務局を設置す。

インドのガンジー翁記念国民財団にて、国際文化福祉協会の指導のもとに、国民生活と産業技術の向上を計ることになり委員会を設置することになる。

ヒマラヤ地区開発会議に出席し、ガジヤラートの全インド農器具製作センターとボンベイのセンター設置決定す。

インド政府の生産省地域開発部の開発センターの指導を行なう。

⑥ 一九六九年

国連に「国際連合への提案書、アジアの生産問題に関する報告書」を提出す。

インドパンジャブ州のラジプーラ、カストルバセワマンデルに、パンジャブ州国際文化福祉協会支部が創立される。

⑦ 一九七〇年

国際文化福祉協会の指導によるグリーン・レボリューションが、農器具製作技術、台湾米と大豆の作付、植林方法、陶器の製作技術の基礎という形で定着して興る。

ガンジー翁記念国民財団が、国際文化福祉協会の指導により、全インドの国民生活と産業の技術開発を行なうことに決定す。

⑧ 一九七一年

日印センター創設議定書をガンジー翁記念国民財団と決定す。

ガンジー翁記念国民財団に日印センターをJ・I・F・O (Japan-India Friendship Organization) と称し、各地の塾からそれぞれ専門技術センター設置を決定す。

⑨ 一九七二年

J・I・F・O の本部をガンジー翁記念国民財団のニューデリーの本部内に設置決定す。

グリーン・レボリューションとは何か?(抄)

グリーン・レボリューションとは、一人一人の人が、自ら樹を植え、それを育てることを行なうことであり、それから起る人類の活動の変化、文化の根底の在り方が変わり、大自らの真の法則・真理に従っていくということなのです。

それは、政府、団体で行なうのもよいでしょうが、本当のグリーン・レボリューションは、どこまでも、一人一人が、自ら自覚してやるということです。

また、義務とか、法律やなんかでなく、自発的にやってくことであり、それも、単に植えるというのではなく、育てるということを行なうことです。

そこに、心の中の変化、生活の在り方、人生への考え方の違い、万事への心構えの違いがあります。

とくに、政府や、公共機関でこれを教えることは、良いことと考えます。

しかし、法律や、その他で義務づけ強制しなくてはならないのです。

どこまでも、一人一人の自発的な行為、心からの自覚によって行なわれ、それが国民の中に浸透し、盛り上ってゆく方向のものであればなりません。

つまり、政府や、その他の団体で行なわれるのではなく、国民一人一人の手で自発的に行なわれるものでなければならぬのです。それから生まれる新しい文化への変化を、グリーン・レボリューションというのです。

難民救済地域開発基金募集趣旨

アジアでは、過去のすばらしい鉄と陶器煉瓦の文化によって森林が失われました。そこには、大地の枯渇による荒廃と餓死、

また、未開のゆえによる貧困があり、さらに近代化による自然破壊がもたらした公害と、社会不安によって、国家、民族文化の闘争から生ずる難民があります。

国際文化福祉協会は、これらの問題を調査研究し、とくに、インドのガンジー翁記念国民財団の関係者と具体的実験をして、今日人間として生きることになるものがあるかを解消し、各地の地域開発を具体化して、世界平和を実現する一つの方向を見出しました。

今、このために、ガンジー翁記念国民財団と協力し、インドと日本に、このためのセンターをつくる準備が進んでいます。

これらのものは、またその成果と共に、将来はアジア、世界の各地に普及されることになっていきます。

ここに、各種の問題のため難民となり、また人間として生きる道を閉ざされて、餓死・病死している人々、また、世界への道を閉ざされている地域の開発のため、私達の手によって世界の人々と共に生きてゆくことの出来る方法をつくり出すための基金をつくらなければなりません。

このため、何卒、皆様の御賛助と、御協力

を、深く深く、切にお願い申し上げます。

国際文化福祉協会とガンジー翁記念

国民財団メンバーとの議定書(抄)

一、国際文化福祉協会とガンジー翁国民記念財団両者は地域に於ける産業、職業資源開発、発展をはかることによりインド国の貧しき人々を援助するために働く。

一、インドに国際文化福祉協会のセンターを作り、そこで上記のような活動を行なう。それと同時に、日本でもその様なセンターを作

一、日印両センターは、共にインドの地域開発のために有益な資料を集める。このためには専門的の科学調査団が必要である。

一、日本で発展し、地域で有用となつてきているそのような技術をインドの若者たちに訓練教育するための機関が必要である。このために明確な計画が立てられなければならない。一定の計画要項が定められ、日本政府は勿論のこと、国連からの協力も必要である。

一、国際文化福祉協会ならびにインド国地域開発のこの計画が、日本政府、インド政府により認められるよう努める。我々は、彼ら

ら財政上の援助を求めているのではなく、彼らのあらゆる分野の施設・協力が、この計画に役立つのである。

一、日本語ヒンズー語辞書を一日も早く作る。

一、インドの市場には、職人の作った手工芸品が多くあり、各地域は、各商業部門や、政府、他の機関の協力により、日本に於て組織化されねばならない。

一、地域経済を促進する工具、機械を日本から輸入する。わずかな力の工具はもとより、農業、産業の手工工具といったような選びぬかれた工具がインドに送られる。

一、国際文化福祉協会インド委員会、日本委員会が結成登録されなければならない。この両委員会の委員は両者の仕事の内容、歴史等をよく理解し、出来れば両国を互に訪問する。

この我々の仕事の目的は、両国の生活向上のためである。このために、両国文化にとって最高のものはすべて、又他国の発展を助けることのできることは全て交換する。これこそ世界平和をもたらし唯一の方法である。